

卷頭言

〈小特集〉

近代日本の植民地支配と「戦争体験」の受粉

Special Issue :

Reconsideration on Japan's Territorial Expansion and Nasty
Aftermath in Post War Period.

十五年戦争、アジア・太平洋戦争という学術的用語では這般の戦争が国民におよぼした精神的呪縛を捉えきれない。ゆえに筆者は「大東亜戦争」という表現をカッコつきで使用することが必要であると考えている。「大東亜戦争」という表現は当時の日本社会と国民の心中に欺瞞、幻想、幻影、期待、虚勢、虚偽などの想念をかき立てた。いかに強権的な戦時政策であっても、国民の最低限の内発性を喚起できなければ継続できない。

敗戦後において侵略戦争批判を命題とするあまり、それら国民の想念とともにあった用語を負の烙印とともに消しさってしまうと、戦争が国民を糾合したことがリアルに認識されなくなり、やがて忘れられてしまう。そこに欺瞞や幻想があったればこそ、それに戦争や戦時政策の「実像」「実体」を対置してそれを摘発することが意味を持つ。それが国民の深部にくい込んだ幻影や虚偽であることが真に認識されてはじめて、それを深部から解体しなければならないという切実な危機感と問題意識が胚胎する。

ここに集った執筆者たちに共有されているのは、こうした切迫した感覚である。それを表現したい一念で、本特集の統一テーマを<近代日本の植民地支配と「戦争体験」の受粉>と銘打った。切り込み方や力点はさまざまであり、またそれを具体的な論稿のなかで表現することは困難をとまなう。各論稿に込められた執筆者たちの疼きを感じとっていただければ幸である。

長島修「北支那製鉄株式会社の成立と崩壊」は日中戦争下の華北経済支配

の要であった北支那製鉄(株)の設立過程と経営実態を実証的に明らかにすることによって、同時期の日本の北支那経済支配の実像を明らかにすることを企図した研究である。同時期の北支那経済支配の実体の解明が不十分な中でそれに切り込もうとする当該分野の第一人者による意欲作であり、今後の研究の進展に道を開く重要な基礎研究である。筆者のこれまでの経営史研究の知見が生かされたうえに、新たな史料の渉猟と分析が加えられていることも注目される。こうした研究をきっかけに、今日低迷の感のある経営史・経済史研究が再び活性化することを期待したい。

落合優翼「鴨緑江管理問題からみる『鮮満』関係—宇垣一成・南次郎朝鮮総督期に着目して—」はこれまでの筆者の精力的な史料発掘の成果がまとめられた論文である。鴨緑江の管理をめぐる朝鮮と満州の確執という着眼点がユニークである。経緯の詳述に偏頗している感が無くはないが、ここでの実証的成果を生かして体系化すれば、さらに貴重な研究成果となろう。

佐藤太久磨「帝国日本の『民主主義』—『植民地議会』設置論と普選の法理—」は近代日本の植民地統治方針をめぐる内地延長主義と特別統治主義の相剋を、普通選挙制度の植民地国への適用と植民地議会設置の是非の対立に焦点を当てて考察したものである。論点の絞り込みが的確であり、これまでの筆者の問題意識が直接に開示された論稿である。

許智香「京城帝国大学『哲学、哲学史』講座の日本人たち—その構成員と制度上の特徴—」は1920年代の植民地朝鮮において「哲学」という学知がいかなる特質をもって成立したのかということを、京城帝国大学における「哲学、哲学史」講座の教育理念と制度的特質、そこで教鞭をとった教員の研究理念を手がかりに考察したものである。問題に迫る検討対象の設定が興味深い。京城帝大の性格を検討するに当たって、在朝日本人学生の比率が高いといった特性が、そこで教授される学知にどのような影響を与えたのかなどについてもう少し踏み込んだ独創的な見解が欲しいが、次なる研究に向けた基礎的作業として大きな意味を持つ。

眞杉侑里「愛知県旭遊廓移転にみる都市と売春営業の立地問題—内務省『貸座敷免許地標準内規』と遊廓移転—」はこれまで遊郭の経営実態の研究を進めてきた筆者が、1900年代初頭（明治後期）の名古屋をフィールドに遊郭の移転問題をめぐる確執のなかから、都市化の進展（都市の膨張）との相互関係を明らかにしようとした意欲作である。今後の遊郭研究の重要な論点でもあり、近代都市史研究にも寄与する成果である。

半田侑子「『日本文化の雑種性』から捉え直すマチネ・ポエティックと加藤周一」は筆者が一貫して取り組んでいる加藤周一の「雑種文化論」を、三好達治をはじめとした戦争詩を執筆した詩人たち、加藤が属したマチネポエティックを批判した「荒地派」の鮎川信夫を両極においた三極構造のなかに再定位することを試みた意欲作である。「雑種文化論」を加藤の西洋経験に触発されたものとみなす理解に修正を迫り、戦前以来の日本文学からの啓発という永いスパンの中で捉える独創的な視点を打ち出している点が興味深い。筆者自身が整理・解説に携わってきた未公開史料「青春ノート」が効果的に活用されていることも貴重である。

小関素明「『戦争体験の思想化』の苦闘—『絶望』を原点にした精神の寄留地の構築—」は近代天皇制のもとで国民が演じる擬態を摘発した「荒地派」の詩人たちの詩と詩論を手がかりに、日本近代主権の強固な精神的呪縛からの離脱の可能性を探った論稿である。離脱のために不可欠であった「戦争体験の思想化」とはいかなる営みであったのかについての序論的考察である。

額原善徳「日本国憲法の国会承認条約の範囲をめぐる政府見解の源流に関する一考察」はこれまで筆者が継続的に取り組んでいた外交条約締結にどの程度の議会の関与が想定されていたのかという点を、日本国憲法73条の規定との関係で明らかにしようとした論稿である。この問題は主権を規律化する外部的機制ともいえる国際条約の締結を議会の承認を解して国民の合意に回収するか、それとも内閣の主導性に委ねて国民の関与を相対的に牽制するかという点にかかわる重要な問題であり、この論文での見通しを発展させ

て、帝国憲法から日本国憲法をつらぬく日本近代主権の特性として解き明かすことが期待される。史料の収集と読み込みもしっかりした堅実な成果である。

加藤政洋「書評 寺澤優『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会—売買春・恋愛の近現代史—』（有志舎、2022年）」は本書の内容を専門とする評者らしい踏み込んだ書評である。提示された論点はいずれも的確で重く受けとらなければならない重要な課題を提示しており、今後本書の筆者がこの論評にどう回答していくのが注目される。性風俗産業の運営や変遷の地域差とそれを生み出す原因を、当該都市の立地や住民構成の差など都市史的、都市構造論的視座を踏まえてさらに分析を深めていってほしい。なお本書は、第18回（2023年度）女性史学章を授賞したことを付記しておきたい。

手前味噌になるが、若手、ベテランの研究者ともども、それぞれの持ち場と関心から日本近代史の要所に切り込んだ力作、野心作ばかりである。完成度の高いもの、今後の自らの研究の基礎作業的なものなどさまざまであるが、投げられた熱量に優劣はない。読者諸賢の厳しいご批判を切に希望する。

立命館大学文学部教授

小関 素明